

注目すべき一論文

加藤 正

見事きんじ金的きんてきを射中いあてた論文は一種爽快の感がするものである。唯研三月号坂本三善兄の『広義の経済学と経済史学』はまさにそうした痛快の所論であった。

弁証法的唯物論の哲学の既往十二年の発展において最も弱い環は現実的科学与結びつき、現実の科学研究に直接必要な思惟の諸法則、諸形態をせんめい闡明することに於いてとかく足踏み勝ちだった点にある。現実の科学研究が形成した諸概念とそれらを扱う技術、——哲学がこれをせんめい闡明することによつて科学の一步一步の発展を助成しなければ、どこに哲学の用があるう。坂本兄の論文の意義は、哲学者がそれを放棄しているとき、専門の社会学者が自ら己の實際研究に即して科学的思惟の様式（法則）を反省し限定しようとした点にある。そしてそれに成功した点にある。そして哲学者が今後科学的思惟の理論とそれを応用する技術をどんな風に探究すべきかの一例を示した点にある。

哲学の中心問題は概念論であり乍ら、現在正にその領域が最も貧弱である。同兄の展開された一般法則と特殊法則との関係の論に対して激しい反対があり乍ら、特殊的具体的法則としての『固有な対象の固有の論理学』に反対意見が出なかつたそうだが、これは一般法則の後者への展開の論理が現在哲学者によつて本当に分析されていず、哲学が一般的抽象的範囲でだけ動いていたことを意味しないだろうか。具体的な論理の展開は立消えになつた自然弁証法の具体化論からも分る通り、観念的には反対がないのだ。しかし、現実的にそこへ進み、その論理を實際に展

開することは、ちよいと行悩むのである。坂本兄は『資本論』と『ロシアにおける資本主義の発展』を例にとって思惟様式を定式されたが、更に科学的概念的思惟の全範囲の一モメントとして、この様式を再展開することができる。哲学はそれをしなければならぬ。科学の任務は現実世界の交互関係の全体の把握であるがこの把握のためには交互関係に入り来る要素がそれ自身の自己運動において分析されねばならぬ。交互関係の表象の中で各要素の夫々それぞれの発展様式が規定された後この交互関係の全体は諸規定の総合として把握される。資本論は歴史の全連関の中で商品および資本の運動を規定したので現実の歴史の交互関係の全体の固有な論理を築き上げる支持点が出来たのだ。全体が規定されるためには、部分がまず規定されねばならぬ。そして部分の規定の止揚しやうとしてのみはじめて全体が規定される等々。

哲学の問題を論ずるお約束を果せず居るまま、即興くだんのごとし言如件。

三・二〇

（『唯研ニュース』第六九号、一九三七年四月一五日）

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年十二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改た。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi} \rightarrow \text{pdf} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。